

賀川豊彦と河合義一

小 南 浩 一 *

A Study of the Relationship and Works of Toyohiko Kagawa and Giichi Kawai

Koichi Kominami *

Received November 5, 1997

1, はじめに

河合義一は賀川豊彦や杉山元治郎⁽¹⁾らとともに日本の農民運動の草分けである。河合は1882年(明治15), 兵庫県加古郡高砂町今津に生まれた。1888年生まれの賀川より6歳, 85年生まれの杉山より3歳年長である。賀川豊彦についてはその評伝, 伝記はもとより, 彼の多岐にわたる社会運動(労働運動・農民運動・消費組合運動・神の国運動等々)に関する研究がすでに多く蓄積されている。また、『賀川豊彦全集』全24巻の「解説」をひとりで担当した武藤富男によれば, 賀川の日記である「身辺雑記」には300を超える人物が登場するという⁽²⁾。そして, しばしば登場する杉山, 行政長蔵, 馬島圃, 村島帰之, 吉田源治郎, 横山春一, 鍵田研一, 竹内勝, 杉山健一郎等々, これら賀川の共労者と賀川の関係については「賀川研究」の範囲のなかに濃淡の差はあれ, ある程度の研究蓄積がある。しかし, 本稿で扱う河合義一と賀川との関係を論じたものは管見の限りない。河合は賀川による政治小説『傾ける大地』の主人公のモデルであり, 日本農民組合(以下, 日農という)創立→分裂過程で行動を共にした日農東播連合会の会長でもある。両者の関係は緊密であり, 農民運動への影響も大きいと思われる。筆者はまえに, 河合が戦前期, 郷里高砂町の町政改革運動や広く兵庫県東播磨地方における農民運動, 労働運動, 無産政党運動などの中核的存在であることを論じた⁽³⁾。本稿ではこうした河合の活動の思想的基盤がつくられたと思われる本郷教会時代, そして農民運動へ入る契機について考察する。さらに河合が最も影響を受けたと思われる賀川豊彦との関係を具体的にあとづけ, 両者のめざした農民運動や無産政党運動がどのようなものであったかを考えたい。なお, 戦後も敗戦直後から日本社会党の創設などで両者は行動をともにするが⁽⁴⁾, 本稿では戦前期における両者の関係に限定する。

* 法学部
Faculty of Law

2, 本郷教会時代の河合

河合と賀川、さらには杉山もキリスト者である。河合は同志社中学卒業後、1901年（明治34）5月、高砂教会で受洗した⁽⁵⁾。同年9月に東京外国語学校フランス語学科に入学、在学中から海老名弾正の主催する本郷教会に出席、日本銀行に就職後の1906年4月22日に正式に転入している。このとき一緒に転入した8人のなかに当時まだ東京法科大学学生であった鈴木文治や、すでに同教会の執事をしていた内ヶ崎作三郎の妻きよ子らがいた⁽⁶⁾。その後1909年、肺結核で南湖院に入院するまでの都合約8年間、河合は同教会に通っていたことになる。当時の本郷教会は大学生などの若い会員が主流であり最も活気に満ちていた時期でもある⁽⁷⁾。本郷教会の青年会である明道会は内ヶ崎、三沢糾、小山東助、吉野作造らが中心となり「東京言論界の名士殆んどが講壇に立ち、松村介石、姉崎正治、井上哲次郎、志賀重昂、三宅雪嶺、山路愛山、高木壬太郎、木下尚江、安部磯雄、浮田和民、内村鑑三、島田三郎、江原素六、徳富蘇峰、大山郁夫…等錚々たる人々が講演し、明道会は実に一世を風靡する社会指導機関の感があった。…その活躍は明治三四年から三九年にかけて行はれ、最も盛大であったのは三九年である」⁽⁸⁾。このように明道会が最も活発に活動した時期に河合は同教会に通っていたことになる⁽⁹⁾。こうした本郷教会での体験は河合にとってキリスト教への理解のみならず、広く社会問題への関心呼び覚ました。例えば安部磯雄はこの本郷教会における講演会の常連であるが、河合はどのように安部の話を聞いたであろうか。河合は同志社中学で安部から英語を教えてもらっている⁽¹⁰⁾。この教会で再びかつての恩師安部と出会うことになる。また、後年、無産政党的の結成で安部は社会民衆党の党首、河合は日本労農党へと袂を分かち、無産政党的の合同→社会大衆党的の結党によって再び同志となる。1937年（昭和12）総選挙で河合が同党から立候補したとき、党首安部は「河合義一君を推薦す」と題して次のような文章を寄せている⁽¹¹⁾。

河合君は私が同志社時代の親愛する教え子です。私は七十三才になる今日まで…一生を日本の無産運動に捧げて来ましたが自分の親しく教え導いた教え子も亦多数全国各地に於て私と同様に社会大衆党的の旗を守つて闘つて居ます。…河合義一君はその中でも私の最も信頼する教え子の一人であり、又同志であります。…河合君は永い間、東播地方の農民運動の草分けとして常に健実に活動し、我が党的の内部は素より外部の方々からも敬愛されてゐる立派な人格者であります。…私は社会大衆党的の責任者として、且つ又、河合君の曾つての先生として、河合君の勝利を祈ると共に皆さんの御支持と御同情を切にお願いいたす次第であります。

河合の三女田美子氏によれば、河合は吉野作造から教会の会計を直接頼まれたという⁽¹²⁾。本郷教会での河合と吉野の接点であるが、吉野は1900年7月の『新人』発刊の直後9月に東京帝国大学に入学、同年末頃より『新人』編集に協力。1904年2月14日に正式転入、同年3月には『新人』誌上に翔天生の名で執筆⁽¹³⁾するなど、内ヶ崎らとともに本郷教会のリーダー的存在であった。従って河合の方は吉野を充分知っていたであろう。吉野は05年1月の総会で教会の会計主任補佐となり、4月の臨時総会で名古屋に転任の小瀧無事郎の後任として会計に昇格している⁽¹⁴⁾。翌06年1月吉野は袁世凱の長男の家庭教師として中国へ渡っている。一方、河合が教会の

会計補佐となるのは07年1月の総会においてであった⁽¹⁵⁾。従って、吉野から直接会計を引き継いだのではなく、その間1年の時間的ずれがある。河合の転入が1年早ければあるいは、吉野のあと直接会計を引き継ぐという形になっていたかも知れない。逆に会計に推されたことが転入の契機であったのか。吉野の口添えがあったか否かは確定できないが、学生の多い教会にとって日本銀行員の河合が会計として推されたのは当然かも知れない⁽¹⁶⁾。そして、翌08年の1月総会で会計の一人に昇格し⁽¹⁷⁾、本郷教会の中核として充実した信仰生活を送ることになる。しかし、翌09年、河合は肺結核で湘南茅ヶ崎南湖院に入院することになる。

3、河合の転機

賀川が何度か死の宣告を受け、煩悶ののち「絶望の淵より驚異の世界に甦」り、「実在の世界に死の力を以つて強く生きんと覚悟した」⁽¹⁸⁾ことはよく知られている。一方、河合の入院した南湖院は熱心なキリスト者である医師高田畊安の経営によるものであった。高田は『新人』に毎号、1頁大にわたる病院の広告をのせるなど本郷教会の有力なスポンサーでもあった⁽¹⁹⁾。河合はここに約2年間入院するが、その間、本郷教会の小山東助や相原一郎介がここ南湖院に入院しており⁽²⁰⁾、入院中も信仰生活が続いていた感がある。

1911年1月河合はついに日銀を退職、郷里高砂に帰る。そして、友人山脇良介のすすめにより小豆島群島の豊島で療養生活を送ることになる⁽²¹⁾。エリート銀行員から一転、失業そして肺結核の療養生活。このときの河合の心境はどうであったろう。日銀退職のあと、1919年（大正8）の高砂町会の補欠選挙で町会議員となり、21年から23年にかけての高砂水道事件、それとほぼ同時にはじまった農民運動での活躍までの約10年間の河合の足跡は記録されていない。36年（昭和11）総選挙で立候補したときの選挙公報における履歴には「明治四十二年病気のため日本銀行を辞し帰郷して農耕に従事しつゝ、身心を養ひ農村問題の経済的研究に没頭。大正十一年、十三ヶ年に亘る農村研究の結論を掲げ、賀川豊彦、杉山元治郎氏等と共に日本農民組合創立に参画す」⁽²²⁾とある。

河合が農民運動に参画する契機は療養中の豊島における小作問題の経験、即ち、友人山脇の縁故者が悪地主の搾取と圧迫に苦しめられているのを見て、河合が地元新聞に投書→地主の怒り、暴力団による脅迫であると『河合義一伝』は指摘している⁽²³⁾。賀川の証言によれば河合は当時、西田天香の主宰する一燈園に入っていたという⁽²⁴⁾。「当時」とは農民運動に入るまえであるが、どれくらいまえかは特定できない。いずれにしても、空白の10年の間であることは間違いない。もし、これが事実であれば、河合は自己の栄達ではなく、一切を捨てて奉仕することの一燈園の精神に共鳴し、自己の思想的訓練をしたのではなかろうか。大正期の思想的状況は青年達をしてこのような精神運動への共鳴をもたらしした。例えば水平社運動の草分けのひとり木村京太郎は、自己の思想的出発点を次のように回想している⁽²⁵⁾。

私も胸をわずらっておったから…病気を治そうと努力したんだけど、しかしこの結核は、薬やなんかで治る時代ではなかったわけです。だからもう自分は死んでもその覚悟だということかたちで、青年団活動に打ち込んで、いわゆる「無我の奉仕」というかたちで、賀川豊彦の『死線を越えて』とか西田天香の『懺悔の生活』とか倉田百三の『出家とその

弟子』とか、そういうような世界観というか宇宙観が変わって、私も自分の個人的な自分ひとりの病気を治そうというのではなしに、生きているうちに生きがいのある生活をしよう、そういうことで青年団活動をやりはじめたわけです。

4、河合と賀川の交渉史

戦前、河合と賀川が特に密接な交渉をもったのは次の3つの時期に分けられる。まず第1は両者の出会いから日農創立の初期である。第2は無産政党問題から日農が分裂→合同する1926年から28年頃である。そして、第3は河合が1937年総選挙に立候補→賀川の応援→当選後、豊島に結核患者の保養所をつくるため両者がしばしば豊島を訪れる38から39年の頃である。

①第1期

さて、河合と賀川の出会いは日農の兵庫県下における最初の支部である中島支部の結成された1922年4月28日であると筆者は前に書いたことがある⁽²⁶⁾。この日、相生座で講演会を開いた後、夜は河合率いる同志会主催のもと公会堂で労働問題小作問題講演会を開き、賀川、杉山、行政が熱弁をふるい、聴衆3000人、高砂開闢以来の盛会であったという⁽²⁷⁾。この集会で河合は賀川に挨拶し、握手をしたと生前語っている⁽²⁸⁾。しかし、河合に師事し農民運動や後年、部落解放運動に活躍した小南真次は、22年3月3日の全国水平社の創立大会に河合に連れていってもらったと証言している⁽²⁹⁾。また、鳥飼慶陽は『賀川豊彦と現代』で特に根拠は示していないが河合の水平社創立大会への参加を指摘している⁽³⁰⁾。事実とすれば、これは賀川とのつながりで参加した可能性があり⁽³¹⁾、両者の出会いはこれより前になる。これを傍証するものとして、高砂水道事件で河合率いる同志会を積極的に支援した神戸暁明会の藤原米造、高山義三、あるいは大阪朝日新聞記者の岡成志などがいずれも賀川人脈であり、賀川を介しての河合支援という可能性が考えられるからである⁽³²⁾。そもそも、先の22年4月28日の同志会主催の講演会で賀川らが演説し、あれだけの盛況を呈するためには事前の計画、打ち合わせが当然行われていたはずである。なお、河合と水平社との関わりについて言えば、中島支部を作るため賀川のところに相談に行った5人のうちのひとり井上岩市は水平社運動にかかわっていたし、大会にも出席したという⁽³³⁾。これは河合の影響かもしれない。また、翌23年の県会議員選挙に農民組合から立候補した河合は「水平同人の援助を受けて漸次侮られぬ勢力を占めつつある」と報じられている⁽³⁴⁾。

日農創立当初から翌23年9月の関東大震災で賀川がその救援のため東京に出発するまで、賀川を初めとする日農本部が河合の拠点である東播磨へいかに足繁く出向いたかを『身辺雑記』や『土地と自由』から見てみよう。◆印が『土地と自由』

1922（大正11）年

2月 断り切れ無い要求に応じて私は、1月中に播磨、呉…と旅行をいたしました。

播磨的那波行はイエス団の行政君の要求で…

◆4月 4月28日 杉山、賀川、行政ら兵庫県中島支部発会式に出席、午後2時より高砂町相生座、7時より公会堂で演説会を開催。（『土地と自由』第5号）

5月 私は、農民組合を興して居る関係上、広く農村に行く機会を多く持つて居る。私は最近北河内に、岡山児島郡に、播州印南郡等に行つた。

- ◆ 5月20日、印南郡の小作代表3名、日農本部を訪問、相談のため

同月23日、印南郡志方町に小作争議応援のため仁科、行政、杉山の三氏行く。寺で演説会、聴衆500人、中島支部より応援に来る。(6号)

- ◆6月 6月10日、印南郡公会堂にて農村問題演説会を開く、賀川、杉山の他顧問の吉田弁護士も出演、聴衆2000余名(7号)

7月 行政長蔵君は、日本農民組合の宣伝部長でイエス団の会員である。厚い信仰を持つていつも戦ひをつづけて居る。行政君は、今度播州石の宝殿の北一里の志方村に屯田した。

- ◆8月 8月7日、播州東志方支部発会式のため仁科、杉山出張、行政挨拶(9号)

1923年

- ◆2月 2月2日、播州国包の演説会に賀川氏とともに出張

2月4日、宗佐支部より松尾、岡本氏本部へ来訪

2月22日、高砂の講演会につき、ゴタゴタ生じ、早朝より高砂町に行き相談、先ず宗佐の記念講演会に臨み、吉田、賀川両氏と共になし、夜はまた、高砂町にて漸く講演をなし河合氏宅に宿る(以上15号)

2月 私は1月は水平社の特殊部落解放演説会や小作人の農民組合の運動の為に大和の田舎や播州の田舎に出かけました。

- ◆3月 3月15日、兵庫県神野村の講演会に出席、夜帰宅すると吉田氏並びに奈良県の米田氏来訪(16号)

- ◆4月 4月20日、米田支部より本部来訪

4月27日、米田支部にて講演、会后、東播連合会の相談会開催、一同連合会を設置に可決(以上17号)

- ◆5月 5月22日、宗佐支部の講演会、尾崎、行政、鈴木文治、杉山の順序で話す。

同月23日、塩市支部に行き、尾崎、行政、河内(河合か?)、鈴木、杉山の順序で話す(以上18号)

- ◆6月 6月11日、播州及び伊勢より小作人本部来訪

同月24日、行政播州の方へ出張(以上19号)

8月 8月5日私は午後1時から加古川の流域を遡って、厄神から三木町へ出た。その夜、私は加古川の公会堂で話をした。

- ◆8月 8月25日、兵庫県議候補河合君の応援のため、二見村に出張、夜は演説会できず。

同月26日、宗佐の公会堂で午後一時より河合君の応援演説をやる。(以上21号)

- ◆9月 9月9日、十時の列車で安藤氏と共に母里村支部発会式に出席、尾崎、河合、安藤、杉山の順序にて話す。夜は河合氏の応援のため加古新田、加古川の二ヶ所にて話し、河合氏宅に宿る(22号)

- ◆10月 10月15日、母里支部より立毛差押の件につき来訪、いろいろ相談

同月22日、米田村にて東播連合会開催出席、本年度小作料の件、主事設置の件、消費組合の件協議(以上23号)

賀川は22年5月に高砂の公会堂で「無産者階級解放論」と題する講演をし、23年2月に河合宅に宿泊している。こうして5月には河合を会長、行政を主事とする東播連合会が連合会組織としては県下で最初、全国でも3番目の早さで結成されている。そして、略年表が示すように、東播連合会は日農本部の賀川、杉山などを招いて「講演会中心の教育啓蒙活動に重点」⁽³⁹⁾をおいた。これは日農創立大会での綱領が示すように農民運動の基礎がまず人格の完成にあるという賀川、杉山、河合らの共通した認識によるものであった。

②第2期

両者が再び密接な交渉をもつのは1926年3月の日農第5回大会→日農第1次分裂以降である。平野力三率いる山梨連合会の脱退に対して、日農中央委員会ははじめ、各県連が非難決議を出している。兵庫県でも淡路、西播の各連合会は非難決議を出しているが、ひとり東播連合会のみ出していない。山梨連合会の脱退は日農創立当初の精神である現実主義が左傾分子の台頭により失われたためである。この認識は実は河合らのそれと同じである。山梨県連の脱退から約1年後、河合、行政、吉田等12名が日農から除名された直後の1927年2月5日、東播連合会は次のような声明書を出している⁽⁴⁰⁾。声明書の冒頭で「農ハ国ノ基デアリ農民ハ国ノ宝デアル」以下の賀川起草による日農創立大会の宣言を全文引用して、次のように言う。

今や我等ノ日本農民組合ハ彼ノ創立当時ノ宣言ノ如ク穩健着実ナ運動方針ヲ捨テ少数ノ意識デ多数ノ盲動ヲ利用シテ其ノ目的ヲ達シヤウトスル人々ノ潜入ニ依テ総本部及其ノ連合会ハ組合創立当時ノ精神トハ全然違ッタモノニナツテ仕舞ッタ…

一方、関東大震災のあと日農第3回大会頃「今日まで多額の金と夥しい労力を費やして育て上げて来た農民組合の本部」が「左翼のために全く占領せられているということ」に「始めて感附いた」⁽⁴¹⁾賀川は、全日農創立大会で「日本農民組合が今日の運命に遭遇すべきことは昨年京都に開催せる第五回全国大会に際し明かなりし」⁽⁴²⁾と挨拶し、第5回大会が日農本部の急進分子への訣別の契機であったことを示している。

また、26年7月の労農党中央委員会は左翼4団体の排斥を決議、これを河合も出席した日農中央委員会が承認した。ところが8月に出された『土地と自由』55号に「労働農民党を活動的のものにせよ」と題して、先の日農中央委員会決定を批判する記事が掲載された。さっそく河合は8月12日付私信で杉山委員長にこの記事は組織原理を無視するものと強く抗議し、その釈明を求めている。このような記事が掲載されること自体、これを書いた仁科⁽⁴³⁾ら本部書記局に対する杉山らの指導力低下を物語るものである。

日農第5回大会以降、日農本部批判の急先鋒であった河合は26年11月に総同盟兵庫県連合会の藤岡文六、安芸盛、山名義鶴らと日労党創立問題について会談している⁽⁴⁴⁾。河合は日農創立以来の東播連合会の調停第一主義が地主、政府の攻勢によって停滞を余儀なくされていたこともあり、新しい農民運動の在り方を模索していた。『神戸又新日報』は「東播連合会の農民ギルド 完全に行けば空気一掃 暗澹たる現状を救ふ」と題する記事を掲げ、「今回日本労農党創立の原動力たる東播農民連合会では河合義一氏が率先して此の農民ギルドの建設に努力してゐる」⁽⁴⁵⁾と報じている。同じ『神戸又新日報』の26年12月1日付けによれば、河合は「加東郡

の某方面に荒地数百町歩を手に入れ、之を開墾して理想的平和の農民村を建設すべく計画を進めて居る。勿論此の農民村建設には同氏と親交のある賀川豊彦氏との提携がある事も事実である」と報じられている。そして「此の農民村にはデンマーク式の農民学校を建設して宗教を基調とした政治経済方面の学問を教授する計画である」とし、さらに「東播連合会の重要問題であった消費組合設置に就ては来月十七八日頃賀川氏」を招いて各地で講演会を開催する予定であり、これらの計画のために「河合氏は目下東奔西走日夜席の暖まる間がないありさまである」と報じられている⁽⁴³⁾。河合が全日農の新役員として、産業部長に就いたのもこの理想実現のためと思われる。藤岡以下総同盟兵庫県連合会の幹部5名の連名による、日労党結成の声明書は河合の提唱するこの新たな運動について次のように述べ⁽⁴³⁾、この運動が同党の重要方針として位置づけられている。

東播連合会に於ては農民運動が、唯地主に対する破壊的階級戦にのみ止まるならば、近く運動の行詰り来るべきことを予知し、既に土地を買ひ入れその上にデンマーク的農民ギルドの組織を建設し、農村階級戦の受太刀時代に備へんとしてゐるのである。日本労農党は全国の労農組合にこの趣の実際方法を組織することをその重要な特色とする。

デンマーク的農民ギルドとはまさに賀川の年来の主張であった。こうしてこの時期、両者は密接な連絡をとりあい行動している。賀川は27年「2月1日に農民大会が開かれた。そして新生の思ひを以てもう一度新しい意味での農民組合運動を出発させた。農民組合の関係で私は一週間に一回くらいは必ず播州加古川の流域や、遠くは伊予境の観音寺辺りまで遠征に出かけている」⁽⁴⁴⁾。新生の思ひを以て出発させた新しい農民組合運動のひとつが同年2月からはじめられた農民福音学校であり、農村消費組合運動である。日農分裂→全日農結成の時期に賀川は河合の拠点である播州加古川の流域に1週間に1回くらい出かけ緊密な連絡を取っていたことになる。しかしまた、賀川は「当分の間、無産政党運動から手を退いて神の国運動に熱中」することになる。この時期は賀川にとっても大きな転換期であったと言えよう。無産政党運動の第一線から手を引き全日農が結成された直後の27年6月から、賀川は河合をモデル、高砂町を舞台とする政治小説『傾ける大地』の連載をスタートさせる。

『傾ける大地』は1927年6月号から翌28年5月号にかけて雑誌『雄弁』に連載された。主人公の杉本英世は「東京の外国語学校を卒業して、今年の春、外交官試験に優等の成績を以て及第」し、「フランス公使館附」(『傾ける大地』『賀川豊彦全集』第15巻所収、112頁)になる予定であるとされている。河合が東京外国語学校フランス語学科に入学したことは既述のとおりである。また、河合は卒業時には成績優秀のため賞としてフランスの文部大臣からフランス語の書籍3冊を送られたという⁽⁴⁵⁾。卒業後、美濃部達吉らに東大進学を進められたが家庭の経済的理由により断念。日本銀行と外務省の2つを受験、何れにも合格していたが、最終的に日銀に決したという経緯がある。この主人公が肺結核に倒れふせっているところからこの小説ははじまるが、これも河合の経験が下敷きにある。『河合義一伝』は主人公は「河合義一と行政をモデルにして書」かれ「二人を混合して半分に割って一人の人物にしているらしい」⁽⁴⁶⁾とあるが、筆者は賀川の意図としてはあくまで当初から河合が主人公のモデルであったと考える。理由は以下の通りである。はやくからの普選論者であった賀川は連載中の27年9月に実施された普選

第1回の府県会議員選挙において、行政長蔵をはじめ多くの同志の応援に走り回っている。9月の日記には

普選！ 普選！ 普選！ たうとう県議の運動が始まり、私は九月十二日をふり出しに、飛び廻ること十八日間、鳥取県、香川県、兵庫県、大阪府、和歌山県の一府四県を飛び廻り、お陰様で、また眼を悪くした。…

神戸イエス団の行政君は兵庫県加古郡で、最高点で当選したが、「政友」を蹴落したお陰で、選挙違反に問はれてゐる。労働争論の時に一緒に食事をした時に何とかかんと云ふなと云ふのが選挙違反とある⁽⁴⁷⁾。

と記されている。また、賀川の万年筆といわれた吉本健子による賀川日記によれば、賀川の行政への肩入れ、小説「傾ける大地」の原稿が選挙中は中断しており、選挙後、一気呵成に執筆された様子がよくわかる⁽⁴⁸⁾。

1927年

4月 初、「傾ける大地」（雄弁小説）

8月 4日、「傾ける大地」原稿書く

9月13日、加古川へ、夜、行政長蔵氏推薦演説

14日、午前原稿、鳩里にて、夜演説会、行政長蔵氏宅にて一泊

21日、午後加古川へ、夜、行政長蔵氏応援、加古川に一泊

26日、阪本、行政長蔵、塚本氏当選

10月 6日、一日在宅、「傾ける大地」69頁12時

7日、「傾ける大地」雄弁へ送る

11月14日、「傾ける大地」37頁

15日、「傾ける大地」一ヶ月分終了、73頁

12月 5日、小説「傾ける大地」

6日、「傾ける大地」2月分終了

このように府県会議員選挙への賀川の並々な肩入れ、しかも同志行政の当選から一転、失脚という事態は賀川をしてこの小説に挿入されるべきかっこうの素材となったのである。従ってこの小説の主人公は河合をモデルにしたものであるが、この選挙場面で、急遽、行政を一部モデルとしたというのが実情ではなかろうか。行政はすでに『壁の声を聞くとき』で雪野鷹蔵で登場しており、当初から行政と河合のふたりをモデルにする意図であれば、主人公の名前も違ったものになっていたであろう。この小説の細部はことごとく河合が活動の拠点とした高砂町及びその周辺で起こった事件で構成され、登場人物も実在の人物の多くの部分、あるいは一部分を援用して造形されている。この小説の書かれた1927、28年当時、両者が農民運動のみならず、地方都市の政治状況やそのあるべき姿などについてひろく語り合ったと思われる。この小説は正義派のなかから裏切りや既成政党との妥協者が出て、主人公は絶望して郷里を去って行く場面で終了する。これは「人間の魂が生まれ変わらない以上、社会改造なんか結局駄目」（253頁）で、人間の改造こそ社会改造の核心であると改めて決意した賀川が本来の宗教者とし

て「永遠の神の国の為に」(253頁)その全精力を傾注するという当時の賀川の宣言でもある。なお、小説『傾ける大地』そのものの分析―登場人物及びそのモデル、扱われた事件と実際の事件の比定、テーマや主張等々―やこの小説の賀川作品に占める位置などについては近くまとめて発表する予定である。

③第3期

河合と賀川の交渉史の第3期のはじまりは1937年総選挙の河合立候補→賀川による応援である⁽⁴⁹⁾。「身辺雑記」はいう⁽⁵⁰⁾。

四月は約二週間を総選挙の応援に費やしてしまった、…大阪に向ひ杉山氏の応援を始めた。そして、途中河合義一氏を姫路に応援し…。幸ひ前川氏も河合義一氏も最高点で当選したことを何より嬉しく思ふ。河合義一氏は立派なクリスチャンであり、その夫人も実に謙遜なよき主婦であるが、僅かばかりの金を調達して、最後に残つた店まで抵当に入れて、選挙運動費を作り、渾身の勇気をもつて努力してゐる様子を見て私は涙なしに応援することが出来なかつた。十数年前この方面の小作争議を、「傾ける大地」といふ小説に書いたことがあるが、今度はその「傾ける大地」の続編を本舞台でやつてゐるやうな気がした。

賀川は翌38年7月の神戸大水害の救援⁽⁵¹⁾に向かった後、9月に大阪水上隣保館の中村遥も同行して河合が管理している豊島の土地を見に行っている。河合と賀川がこの豊島に結核患者のための保養農園を作る約束をしたのは先述の交渉史の第2期にあたる⁽⁵²⁾。38年10月には神愛保養農園の建築がはじまっている。賀川自身はこの後、インドに向けて出発、日本を留守にするが妻の春子が豊島を訪れている。翌39年1月『雲の柱』によれば、38年12月12日、東京を発って豊島に西下、途中播州の加古川駅に下車、代議士河合夫妻、曾根の農村伝道に尽力する石田英雄⁽⁵³⁾夫妻、20年来の知己行政長蔵夫妻らに迎えられる。夜、高砂の旅館に宿泊。翌13日、石田牧師が主催する曾根の農村教会で集会。14日、姫路駅から河合等とともに豊島に向かう。豊島着、夜は「河合代議士を中心に神愛農園の青年方と」懇談。翌朝、河合の長男義太郎⁽⁵⁴⁾が静養する居を訪ねた。春子は「誠に豊島の如きは心身を養ふに最もよき処である」「都市の塵芥にも遠く離れ、この風光明媚な仙境にあつて深く神の御旨を悟つて再生の喜びを與へらるゝは必然のことと思ふ」とその印象を記している⁽⁵⁵⁾。翌39年3月に帰国した賀川は、4月6日、河合とともに豊島村役場に村長を訪ね、結核保養所を作ることへの了解を求めた。村長も賛意を表し、村会への了解を得るべく努力するとのことであつた。その夜、二人は高松屋旅館に同宿している。その後も賀川はしばしば豊島を訪れ保養園建設に奔走するが、すでに申し込みが通算400名を超えるという関心の高さを示した⁽⁵⁶⁾。しかし、豊島村長から賀川に宛てた9月7日付の葉書は、結核者収容の事業は停止し、普通農園などに方針変更願いたいとのことであつた⁽⁵⁷⁾。賀川は「誠に残念だが、已むを得ないことと思ふ。しかし農園だけは継続して将来農民福音学校の方に使用したい」とした。こうして、賀川や河合の当初の計画は頓挫することになる。しかも、戦時下でキリスト教の弾圧が厳しく、伝道や事業なども出来ない状態で、賀川自身も豊島神子ヶ浜で軟禁される。しかし、敗戦後の1947年1月、藤崎盛一がこの豊島で第1回農民福音学校を開校し、さらに同年8月には吉村静江が8名の孤児を連れて豊島に来島、豊島神愛館(乳児院)

を開設するなど、賀川がこの豊島で生かされることになる。

河合にとって豊島は原点でもある。肺結核で日銀を退職した後の豊島での療養生活、そしてこの地での小作問題との出会いが農民運動家河合の原点であったことは既に述べたとおりである。大正末期に友人三谷がこの豊島に18町歩の土地を河合のために買ってくれた⁽⁵⁸⁾。河合は病弱であった長男義太郎のためにここに家を建て療養させている。また、この膨大な土地の利用について河合は賀川や杉山に相談し、指導も受けていた。おそらく賀川の持論である立体農業や家畜の利用などについて両者は語ったであろう。『河合義一伝』によれば、1937年頃に18町歩の土地の約半分を賀川が河合より買い取ったという。一方、河合が売ったのは36、37年と2年続けて衆議院選挙に立候補した経済的事情があったのではないかと推測されている⁽⁵⁹⁾。あるいは、そういう事情があったのかもしれない。しかし、神愛保養農園の目的が「人格主義に立脚せる健康鍛錬」⁽⁶⁰⁾とあるように、両者の年来の主張の実現をこの豊島ではかろうとしたものであることは明らかである。

5. おわりに

以上みてきたように、今まで取りあげられることのなかった賀川と河合の関係が予想以上に緊密なものであることが明らかになった。また、日農と東播連合会のつながりが賀川、杉山と河合、行政らの人格的な結びつきによるものであることも明らかになった。そして、日農分裂期の農民運動の転換期にも両者は連携して、農民ギルドの建設や農村消費組合の設立などに奔走したこともすでにみてきたとおりである。河合が賀川に提供した豊島は戦時下、活動を制限された賀川がここに籠もって著述に専念した拠点でもあった。1941年、河合の妻ちよは54歳の生涯を閉じた。葬式はキリスト教で、弔いの説教をしたのは賀川であった⁽⁶¹⁾。

赤松啓介によれば、昭和戦前期の1933年当時、河合の同志行政は農民運動に絶望し戦線から離脱の状況であったが、河合はまだかなり楽観的で農民運動にとどまっていたという⁽⁶²⁾。同じく同志であった吉田賢一が転向して皇国農民同盟を設立するのも33年末のことである。さらに赤松は河合の印象を「河合義一は極めて楽天的で、誠実な性格であり、組合運動でも親切であったから組合員のみでなく、一般の農民からも非常に信頼されていた」⁽⁶³⁾と語っている。河合にとって社会改造の基礎が人間の改造である以上、それは息の長い仕事であった。「ゆっくり堅実に大地を踏みしめ前進」⁽⁶⁴⁾せよとは賀川の年来の主張であり、この点、両者は完全に一致していた。また、人間の改造は人間性の信頼に基づくものであるという点でも両者は一致している。さらにそれはいうまでもなくイエス・キリストへの信頼に通じるものである。若き日、本郷教会で一緒であった吉野作造もまた、人間性への楽観的とも言える信頼を寄せていた⁽⁶⁵⁾。「代議士にはならない」⁽⁶⁶⁾と誓った賀川は、代議士となった杉山や河合にその任務を託し、自らは伝道者として⁽⁶⁷⁾社会改造に取り組むこととなる。新見＝賀川はこう語っている。

真の改造は一代や二代で出来るとも思ひませぬ。… それには、神の内側の力が加はらなければ駄目だと思ひます。然し内側の力は人間には良心の力より他にありませぬから、神様が、良心の力を強くして下さらなければ、世界はとても善くならぬと思ひます。それで、私の社会運動も、宗教運動も、結局は同じ目的を以つて両方面に向つてゐるだけで、「道德革命」を主張してゐるより他はないのです⁽⁶⁸⁾。

註

- (1) 本稿では河合と杉山との関係については特に論じないが、日農創立から分裂期、さらには戦時期の解散にいたるまで両者はつねに行動をともにしている。『土地と自由のために－杉山元治郎伝』によれば、多くの農民運動家の中で杉山と特に親しい人物として三宅正一、須永好とともに河合の名があげられている（同書、日刊農業新聞社、1965年、274頁）。
- (2) 賀川豊彦全集刊行会『賀川豊彦全集』第24巻、キリスト新聞社、1982年版、562頁。なお、本稿で引用する『賀川豊彦全集』はすべて1982年版とする。
- (3) 拙稿「東播磨高砂地方の大正デモクラシー」（日本法政学会『法政論叢』第31巻、1995年所収）、同「大正デモクラシー期の高砂町政問題」（兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県の歴史』第32号、1996年所収）。
- (4) 戦後の河合の動向については拙稿「戦後の河合義一」（神戸史学会編集『歴史と神戸』第35巻、第6号、1996年所収）を参照のこと。
- (5) 河合義一伝刊行委員会編『河合義一 農民の友として』1976年（以下『河合義一伝』とする）18頁、33頁。
- (6) 本郷教会機関誌『新人』第7巻第5号、1906年5月（以下、『新人』何年何月と記す）。なお、同記事によれば当日の受洗晩餐式は数百名の出席のもと、海老名による受洗式、同牧師の「人生の価値」なる説教ののち、新入会員歓迎会が催されたという。
- (7) 同上『新人』1905年2月に1904年当時の本郷教会会員状況が記されている。それによれば、会員総数380名のうち28歳以下は206名、職業分類では最も多いのは学生で168名とある。本郷教会が書生教会といわれる所以である。
- (8) 日本基督教団『弓町本郷教会百年史』1986年、338頁。なお、『新人』から明道会による講演会を拾ってみると、例えば1904年3月27日、山路愛山「非戦論」、木下尚江「海老名弾正氏の立脚及び将来」、同5月1日、石川三四郎の社会主義談などがある。また、1905年7月号『新人』によれば同年6月5・6・7の3日間、連日の演説会が開かれ、講師と演題は栗原基「文学者の基督観」、松村介石「主義と基督」、島田三郎「我が信ずる基督」、木下尚江「日本の政論と基督教」、安部磯雄「社会主義者のキリスト観」、海老名「我党の主張」、浮田和民「史家のキリスト観」、巖本善治「教育家のキリスト観」とある。
- (9) 前掲『河合義一伝』によれば「若き義一も汗のこぼしを握りしめ、夢中になって説教・講話・講演にきき入った、と自ら回顧して語っている」（同書39頁）。また、東京時代、河合は美濃部達吉の兄俊吉家や美濃部家の末娘の嫁いだ南家に下宿していたが、この南家で河合は広い一室をあてがわれ家族の一員としてあたたかく遇されたという。日曜日ごとに夫婦も出かけていくが、河合とは別の教会に行っていたらしい（1997年9月8日、河合の三女田美子氏談）。
- (10) 安部は河合が同志社中学に入学した年の翌1897年1月に同志社に赴任、99年4月に上京するまで教鞭をとった。河合の三女田美子氏によれば、同志社は予習を大変重視していて、河合はウェブスターの辞書で充分予習をやり、あるとき、教師である安部に授業中その誤りを指摘したことがあった。安部は同志社を去るとき、後任の英語教師に河合君には注意せよという旨の発言をしたという。なお、田美子は父の薦めで同志社に進学し、父から予習の大切さを教えられたという（1997年9月8日、田美子氏談）。
- (11) 「社会大衆党新聞」1937年4月。
- (12) 1993年8月1日、及び97年9月8日、三女田美子氏からの聞き取り。
- (13) 『新人』1904年3月、『吉野作造選集 別巻』岩波書店、1997年、76～78頁。なお、吉野が『新人』に最初に執筆したのは1903年2月号においてである。
- (14) 『新人』1905年5月。
- (15) 同上、1907年2月。
- (16) 本郷教会の役員は複数の執事と複数の会計主任と補佐、日曜学校長、複数の財産管理者などであるが、執事と会計がその他の役員選定を一任されたり（『新人』1907年2月号）、また執事が会計主任に異動するなど会計が重職であることを示している。例えば河合が正式転入した1906年の会計松浦一雄や翌07年の荒木真弓などは、本郷教会初期からの会員で、ともに実業に携わり、年齢的にも河合より30歳ちかくうえの重鎮であった（前掲『弓町本郷教会百年史』414～421頁）。
- (17) 前掲『新人』1908年2月。
- (18) 『死線を越えて』（『賀川豊彦全集』第14巻所収、132頁）。
- (19) 前掲『河合義一伝』54～55頁。
- (20) 前掲『新人』1910年12月。
- (21) 前掲『河合義一伝』85頁。
- (22) 「選挙公報」発行人 兵庫県知事湯沢三千男、1936年2月15日。
- (23) 前掲『河合義一伝』86頁。
- (24) 賀川豊彦を囲む座談会での賀川の談、1957年のことと思われる。聞き手の一人であった、当時兵庫県労働経済研究所員の洪野純一氏のメモを、高木伸夫氏から頂いた。高木氏の学恩に感謝する。なお、筆者はご遺族の方にこの一燈園についてうかがったが、河合自身から直接、一燈園について聞いたことはないとのことであった。
- (25) 「賀川豊彦のことなど 木村京太郎さんに聴く」（『月刊部落問題』142号、1988年所収、30頁）。なお、遠島

- 欽二『賀川豊彦、西田天香、倉田百三と其信仰』という書物が1922年に出版されており、「無我」という共通項で3者を並べて論じる風潮があった。
- (26) 拙稿『大正デモクラシーと河合義一』兵庫教育大学修士論文、1993年、37～40頁。
- (27) 日本農民組合機関紙『土地と自由』第6号、1922年6月25日、前掲『土地と自由のために一杉山元治郎伝』198頁。
- (28) 前掲『河合義一伝』147～148頁。また、三男信吉氏も「父は生前、賀川先生には高砂の相生座の講演会ではじめてお目にかかったと語っていた」と証言している（同書、143～144頁）。
- (29) 同上『河合義一伝』119頁。
- (30) 鳥飼慶陽『賀川豊彦と現代』兵庫県部落問題研究所、1988年、123頁。
- (31) 水平社創立の中心メンバーとなる西光万吉、阪本清一郎ら燕会のメンバーが消費組合について新川の賀川をたずね、助言を請うたことはよく知られている（西光万吉『水平社が生まれるまで』、同『略歴と感想』（『西光万吉著作集』第一巻所収、濤書房、1971年、49頁及び86頁）。また、阪本清一郎の証言もある（福田雅子『証言・全国水平社』日本放送出版協会、1985年、73頁）。こうした西光や阪本と賀川との密接な関係から『朝日新聞』は水平社の総裁候補として賀川の名を報じている（『水平社の源流』編集委員会編『水平社の源流』解放出版社、1992年、201～202頁）。
- (32) 藤原は普選運動や、21年の川崎・三菱造船所争議で賀川と行動をともししており、高山義三も同争議の弁護にあたり、また日農の法律顧問になっている。岡も高山とともに日農の法律顧問をつとめている。さらに岡は日農の創立発起人にも名を連ねている。
- (33) 1993年7月20日、井上岩市の長女ます江氏に聞く。
- (34) 『大阪毎日新聞』1923年9月20日。
- (35) 農民運動史研究会編『日本農民運動史』御茶の水書房、復刻版、1989年、596頁。
- (36) 法政大学大原社会問題研究所『日農分裂問題資料』1956年、109頁。
- (37) 『石の枕を立てて』（『賀川豊彦全集』第19巻所収、313頁）。
- (38) 内務省社会局『昭和二年労働運動年報』明治文献、1971年、1020頁。
- (39) 岩村登志夫は賀川ら改良主義日農幹部と訣別せざるをえなかった仁科雄一の思想的特質を詳細に論じている（『若き日の仁科雄一とその周辺』（上・下）『日本史研究』144号、147号、1974年所収）。
- (40) 兵庫県労働運動史編さん委員会編『兵庫県労働運動史』1961年、243頁。
- (41) 『神戸又新日報』1926年12月3日。
- (42) 同上、1926年12月1日。
- (43) 『神戸新聞』1926年12月2日。
- (44) 「身辺雑記」（『賀川豊彦全集』第24巻所収、77頁）。
- (45) 『河合義一伝』38頁。なお、筆者は河合氏の次女正子氏から1993年2月4日に高砂の自宅でお話を伺った。3冊の内、2冊が震災で焼失、残り1冊が手元にある。ピエール・ド・ルーボー著『地中海』という大部の本を見せていただいた。
- (46) 前掲『河合義一伝』133頁。
- (47) 前掲「身辺雑記」（『賀川豊彦全集』第24巻所収、89頁）。
- (48) 賀川豊彦記念・松沢資料館所蔵『日記（I）』1926、11～1928、12 吉本（健子）記
- (49) 河合は前年も立候補したが、この時は賀川は渡米中であった。国内にいれば37年同様、無産派の選挙応援に奔走したであろう。
- (50) 『賀川豊彦全集』第24巻、231頁。
- (51) 実はこの時、河合も救援活動に参加していた。河合に引率されて参加した杉田浅治は死体の掘り起こし作業が難航し、河合に「先生もっとどこかよい所へ行きましようか」と弱音をはくと、河合は「どこへ行っても同じです。むつかしいところでもだれかがしなければなりません。ここで一生懸命働いておったらよいのです」とまたコツコツと掘り起しにかかったと語っている。（前掲『河合義一伝』257頁）。
- (52) 前掲「身辺雑記」（『賀川豊彦全集』第24巻所収、266頁）。
- (53) 石田は1928年3月、賀川の紹介で『農村伝道圏（ママ）の一員として播磨高砂町河合義一氏の宅に行った。氏は二三日して、伊保村中島と言う四五〇戸の純農村へ私を送り込んだ（竹中正夫『土に祈る 耕牧石田英雄の生涯』教文館、1985年、91頁）。
- (54) 河合の長男義太郎氏は本年、1997年8月2日、天に召された。享年88才。
- (55) 賀川春子はこの時の豊島訪問記を『火の柱』第113号、1939年1月30日にも発表している。
- (56) この計画は『雲の柱』やキリスト教関係の新聞だけでなく、『大阪朝日新聞』など一般紙にも掲載され、その問い合わせや申し込みが殺到したとある（『火の柱』112号、1938年12月10日）。
- (57) 『雲の柱』第18巻、第10号、1939年10月、16頁。
- (58) 前掲『河合義一伝』116頁。
- (59) 前掲『河合義一伝』117頁。
- (60) 『火の柱』第112号、1938年12月10日。
- (61) 前掲『河合義一伝』74頁。

- (62) 赤松啓介「河合義一氏と農民運動史」(前掲『河合義一伝』所収, 242頁)。
- (63) 同上。
- (64) 吉田賢一伝刊行世話人会『道を求めて 吉田賢一伝』1983年, 91頁。
- (65) 武田清子「吉野作造における政治と人間」によれば, 彼の人間観は「人間の罪の指摘よりも, 機会さえ与えれば人間は無限に成長するという肯定面の方が強調された楽観的人間観である」という(同著『土着と背教』新教出版社, 1967年所収, 219頁)。
- (66) 前掲「身辺雑記」(『賀川豊彦全集』第24巻所収, 62頁)。
- (67) 村島帰之は賀川の創意によって生まれた多種多様の社会事業および運動も結局は「隣人愛」の実践で, 賀川は「事業家」であるよりも偉大なる指導者であると指摘している(村島帰之「賀川豊彦氏の社会事業とその特性」(『雲の柱』第19巻, 第6号所収)。
- (68) 「壁の声を聞くととき」(『賀川豊彦全集』第14巻所収, 530頁)。